26PB-am229

早期体験学習の学習方略の改善

○木下 雅子[1], 有山 智博[1], 石井 敏浩[1], 柳川 忠二[1]（[1]東邦大薬）

【目的】平成 18 年より早期体験学習が開講された。本校では、’薬学出身者の社会的役割’と、’今後何を学ぶか’を理解するために、施設見学を中心として実施してきた。また、同科目で施設見学後に小グループ討議(以下 SGD)の導入を行い体験した内容を整理させてきた。この場合、施設見学時に知識不足のため学生が消極的であることが問題であった。早期体験学習での学習効果の向上を目的として平成 25 年度より SGD の実施時期・回数・討議内容を変更した。

【方法】施設見学前にも SGD を実施して、施設概要・イメージしている薬剤師の社会的役割・薬剤師への質問を討議させた。見学前 SGD を導入前後で学生の態度に変化が現れたかを、引率教員のアンケート及び、見学後に学生が作成するポスターから評価した。また、平成 26 年度より入学式の数日後に SGD を行い学生の薬学に対する意識を確認した。

【結果】入学直後の SGD では、学生は患者のための薬物治療ではなく、学生自身や家族のための薬物治療の知識の修得を目的としていたことが解った。学びたい内容は多岐に渡り具体的であることも解った。引率教員のアンケートの結果より、見学前 SGD を実施することで、薬学出身者の役割をイメージすることにより、見学時に積極的に質問するようになったことが明らかになった。また、現場の薬剤師と積極的に討議することができるようになり、そこで得た知識によって、見学後 SGD で作成したポスターでは、平成 24 年以前より具体的に薬学出身者の役割について示されるようになった。これらのことで、積極的に見学を実施できたことが明らかになった。同科目を通じて薬学出身者の社会的役割を認識し、薬学で学ぶことを理解していたことが入学直後の SGD の実施より明らかになった。